

---

# IS < 守護の魂 >

クーロン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS<守護の魂>

### 【Nコード】

N1602X

### 【作者名】

クーロン

### 【あらすじ】

気が付くと変な空間にいた。話していてイライラする自称神父様もいる。すると、いつのまにか死んで女として転生することになっていた。

その世界は、インフィニットストラトス。

## プロローグ（前書き）

一言、駄文です。努力はしますがあまり期待しないでください。でも感想などいただけたらうれしいです。いろいろとアドバイスもいただけたらまたうれしいです。

みなさんに楽しんで読んでもらいたいのは当然ありますが、正直余裕ないです。

長い駄文ですがどうぞ。

## プロローグ

ふと意識が戻る。白？いや黒か？なにか不思議な空間に浮かんで  
いるようだった。

ここはいつたい。っは！あのセリフ言うチャンスだったじゃな  
いか！まだいいかな？よし、言ってしまおう。知らない天じ

「ああいいかね？すまんが時間があまりないのだ。ワタシとこれ  
からの話をしてもらいたいのだが？ちなみにこの空間には天井など  
存在しないぞ。」

「……誰だ。」

「できればそのような目をしないでもらいたいものだが無理な話  
か。ふむ、まずは自己紹介をしておこうか。ワタシは君たちの世界  
を統括している存在だ。」

神とでも言うつもりか……

「そのたとえは君たち人類からすれば大変わかりやすいであろうが、  
言っておこうか。神ではないぞ？まあ、呼び名は重要ではないな。」

「……なら何て呼べばいい……」

「重要ではないと言ったはずだが……まあよからう。私のこ  
とは神父様とでも呼ぶがいい。」

馬鹿にしたような顔で馬鹿にしたような声が響く

「……神父は神父でも似非神父だろうな……」

「ふっ、これはずいぶんと酷い言葉だな。迷える子羊に救いを与  
えているというのに。だが無駄話はこちらまでにしようか。いいかね  
？簡潔に説明しよう。君は死んだ。」

その言葉に思考が止まる。



その言葉に従い椅子に座る。

「さて、ようやく話ができるな。君は幼いころからの病で死んだ。思い出したかね？」

「ああ、思い出した」

「そしてだ。通常死んだ者の魂はここには来ない。だが君は選ばれたのだ。」

「選ばれた？」

「そうだ。君は選ばれた。ワタシの上にいる者たちの気まぐれによつてな。」

何も言えない俺に似非神父は苦笑しながら言った。

「君には転生というものをしてもらう。ちなみに行くのはインフイニットストラトスの世界だ。知っているだろう？」

そりゃあ知ってる。友人に勧められてよく読んだものだから。

「でもあれは、ライトノベルだろ？」

落ち着いてきた俺は注意深くなりながら答える。

「はあ。世界というものは君たちの言う2次元にもあるのだよ。

そしてこれは決定事項だ。行ってもらう。そこでサービスだが望むのなら力を与えよう。」

ため息をつきながら説明された。

行くことは決まっている。じゃあ何も言えないじゃないか。不満はあるが。

「わかった行こう。強すぎる力。それこそチートな力はいらない。ただ、少しだけでも丈夫な体がほしい」

病院暮らした俺の長年の夢、望みだ。

「わかった。そうしよう。だがいいのかね？最後のチャンスだが？」

似非神父は意外と真面目な声で言うてくる。

「それだけで構わないさ。」

俺は苦笑しながら答える。

「欲のない。ならば一つ私から適当に才能を与えよう。答えは聞かん。」

吐き捨てるように言い、似非神父は立ち上がると俺の後ろを指さす。

「この方向に行くと扉がある。そこを通りたまえ。それだけだ。ではワタシは消えるでしょう。ではな。」

そう言っただけで徐々に消えていく。

「ありがとう。・・・神父様。」

消えていく神父様にさういうと、少し驚いた顔をして消えていった。

「ごまあ。」

その顔にに少しの快感を覚え、思わずつぶやいた。

「さて行くか。」

立ち上がり示された方向へしばらく歩く。するとそれほど歩いたつもりはなかったのだが、すぐに扉が見え、これまたすぐにたどり着いた。

「正直どこでもドアにしか見えないんだけど。それともどこまでもドアってか？なんちゃって。」

余裕がでてきたのか。くだらないことを言いつつもドアノブを握って回し、扉を開け足を踏み出す。するとすさまじい光に包まれながらも、踏み出した足が地を

「はっ？」

踏まなかった。

落ちた。

ただただ落ちた。

「のわあああああ！！」

思わず叫ぶ。その間も当然落ちていく。

落ちていく中で似非神父の声が聞こえた。

「言い忘れていたが、向こうの世界では君は女として生きることになる。」

なんだそれもつと早く言えよ!! 忘れていいものじゃねえよ!!

「ふざけるなああああああ!!」

俺は叫んだ。

「大丈夫だ。違和感はないようにしておく。では来世を楽しみたまえ。」

やっぱりおまえは似非神父だ!!

## プロローグ（後書き）

あの、どうでしたか？プロローグはもうわけがわからず思いついたことを書いていくだけの暴走状態でした。準備運動のような感じで書いたので。

すぐに終わってしまうことのないように、書いていきたいと思うので応援してください。

第1話 知らない天井です・・・当然でしたね（前書き）

続けて投稿がんばります。

## 第1話 知らない天井です・・・当然でしたね

なんだか暖かい。

「あら、目が覚めたのかしら。」

女の人の優しい声が聞こえてくる。それに引きずられるように少しづつ覚醒しそうになる。

「どうしたんだい？愛理<sup>あいり</sup>。」

「切嗣<sup>きりつぐ</sup>？この子が起きそうなの。」

男性と女性の声。ぼんやりとした意識の中で会話を聞く。

「愛理。この子の名前なんだけど。決めたかい？」

「あら、あなたは考えてないの？」

「当然考えたさ。でも君が付けたいかと思ったんだ。」

「じゃあ、私が付けるわね？」

「いいよ。」

「この子の名前は”奏”森宮奏。」

そこまで聞いて意識が途絶えた・・・

・・・さすがに赤子のころから過ごすのはつらかるう。幼稚園に入るまで飛ぶようにしておく・・・

似非神父の声が響いた。

俺は、いや私は似非神父の言った通りに幼稚園に行く頃、完全に覚醒しました。そろそろ小学生に入る頃です。そして今は家にあるやたらとでかい道場にいます。

「奏。今日から稽古に入る。今まで無理のないように体作りをしてきたが、本格的にすることとなる。」

体作り。はいやっておりましたよ。つまるところ幼稚園の友達との遊びの中でできる簡単なものでした。体はちゃんと丈夫でした。

周りの子より少しの程度でしたが。

そして実は、私の家は昔から続く武家の家系だったようで、この家独自の武術を修めなければならぬのです。強制ではないのですが。そして今話しているのは私の父様である宮森切嗣です。

「森宮家は代々女性が当主となってきた。」

そうなんです。父様が当主ではないのです。なんとというか宮森家の女性は強いということでしょうか？実際母様は車を投げっていました。力ではなく技術だと言っていました。

「この森宮流は

長いですね。いえいえ、ちゃんと聞いていますよ。ただとにかく長いのです。

よって、最初はひたすら型を繰り返すこととなる。」

「はい！」

しっかりと返事をする。

「よし。では一の型から始めようか。」

よし、がんばりますよ。

第2話 稽古・・・才能・・・親馬鹿です（前書き）

早く原作に入りたいものです。この話はキーワードや思い付きをメモしてそのまま文章を考えて書いています。なので前後の話がつかないなど変なことになるかもしれません。ご了承ください。

感想欄を毎日暇さえあれば見ているのですが。まだ一つもないのでこんな感じで書いていてもいいのかと迷っています。皆様の感想も参考、指針にするつもりです。応援メッセージだとなおうれしいです。

第2話 稽古・・・才能・・・親馬鹿です

kanade's side

ビュンッ!

「っ!?!」

風を切り裂き振るわれる一撃を避ける。

ダッ!ドッ!!

「いつつ!」

避けた私を追い、さらにもう一撃。

これを紙一重で避け私は逆に接近し、一矢報いてやろうと攻めに入る。

正面から突っ込み、自分の間合いに入る。

左足を踏み込み、左ひざ・股関節・右肩・右ひじ・右手首の関節を使い、加速させた右の拳を相手に思いっきり打ち込む。

・・・が。

「はい。そこっ!!!」

ヒュッ!

足払いで体制を崩され尻餅をつく。

そこへ追い打ちをかけるのが“見える”。

ああ。これは無理ですね。

「あうっ!?!」

パシッ!

痛たたた。これは何をしていたのか分かりますよね?そうですよ! 父様相手に稽古ですよ!まったく、いくらなんでも思いつきり叩くのはやめてほしいです!!

見えるのに対処できないことがこんなに悔しいとは思いませんで

した。最初は、たまに遅く見える程度だったのですが、今では集中すれば常に発動状態です。動体視力のランクはAです！！さっきのは冗談ですが。まあ、見えても避けられないのでは意味がないんですけど。某史上最強の弟子も言っていました。でも、こんなことで実感したくなかったです。

痛いんですもん……。

kirituguguside)

稽古を終え使っていた竹刀を点検しながら考えていた。

(ここまでもたせられるとは思わなかった……)

自分でもここまで真剣に考えるのは久しぶりのことだった。それほどまでに、娘の才能は素晴らしかった。特に目に関しては他を圧倒している。

(残念だけど見えても体がついていけないんだよね。)

そう、逆に言えば今はそれだけなのだ。“今は”だが。

(将来、体が追い付いてくれば……化けるかもね。)

(それにしても、最後は驚いた。まだ甘いけど少し本気にさせられた。)

将来が楽しみだ。そう思い、今度は別のことを考える。

(そろそろ他の子たちと一緒に稽古をするのもいいだろうし、こっちにも参加させようかな。)

近所の子供たちに関いている道場のことを思いながら、ふと、奏の方へ目を向ける。

(つつっ!!)

そこには少し涙目になりながら打たれた頭をさすっている奏がいた。

「か、奏？大丈夫かい？」

こみ上げてくる衝動に耐えながらそう聞く。

「だ……大丈夫でしゅ（ガリッ）つつっ!？」

( 噛んだ！？でも・・・ )

「か、かゝわゝいゝゝいゝゝ!!」

この親父・・・結構な親馬鹿である・・・

( カメラがあればあー!! )

第2話 稽古・・・才能・・・親馬鹿です（後書き）

今回はもう少し長くして、学校生活も入れようかと思ってました。でもそれは次回になると思います。

設定を考えるのはすごく楽しいですね！！次から次へと思いつく時は手が止まらないです。それをこうして書くのは難しいですけど。主人公のisは正直ほとんどパクリになりました。パクリといっても他の二次創作からではありませんよ。元ネタそのままになってしまっただけです。

### 第3話 日常（前書き）

久しぶりの投稿になります。見直してかなり文章が変わってしまいました。読んでくれるとうれしく思います。

### 第3話 日常

Kanade\side\

「行ってきまーす！」

「行ってらっしやいませ。お嬢(様)」「」

靴を履き終え、元気よく言ったその言葉に帰ってくる二つの落ち着きのありよく似た男性の声。

振り返るとそこに居るのは夜行妃古寺と丈一。

ある意味立派なチヨビ髭を蓄えているのが妃古寺。

髭はないが顔に大きな傷が一つ走っているのが丈一。

そして、二人は双子で二人共が私の世話役。

どこのお嬢様だと言うかもしれないが、事実なのだ。

(やっぱり普通じゃない。)

そうは思うが私はまだ何も教えてもらっていない。

だが思ってしまうのも当然だと言いたい。

玄関から飛び出したものの、門までは10メートル以上あり、玄関から門まで続く道の周りには立派な庭が広がっているのだ。

(お抱えの庭師までいたよね。たしか。)

考えている合間に門までたどり着く。

(帰ったら美年爺様に聞いてみようかな。)

祖父の様に慕っている物知りじいさんのことを思い出す。

だが、そこで考えに区切りをつけ学校について考えることにする。

性別は・・・まあ考えないようにしよう。

逆に自分が男だったことに違和感があるくらいだ。

過去の事。それも前世の事だ。

しかし、それでも過ごした18年という月日があるのだ。

ならば、

(勉強が簡単すぎてつまらない。)

このことしかないのだ。

しかも、小学校での勉強は繰り返し、反復ばかりするものだから面倒極まりない。

数学・・・違った。算数はその最たるものだ。

足し算・引き算・繰り上がり・繰り下がり・九九・掛け算・割り算

(うわぁ、考えるだけでいやになってきた・・・)

これらは何度も何度も・・・

(やめよう。)

そうは思うものの、あとは友人関係ぐらい・・・なのだが。

(できるわけがないよ。考えることが違いすぎる。)

細かいかもしれないが友人関係という言い方をする小学生がいるわけがない。

たぶん。きっと。メイビー・・・。

(よく話す子はいるんだけどな。)

傍<sup>はた</sup>から見ればそう見えるんだろうが、実際は四苦八苦しながら話を合わせている状態になっており、ほとんど聞く側になっている。

(あとは原作組の観察しかないか・・・)

実は私に通っている小学校には、違うクラスだがISの原作二人組も通っている。

これを観察しているのだ。

(少し楽しみになってきたな。今日はあの朴念仁および鈍感王は何をやるのかな?)

だが、ただ見ているだけ。

私は、原作に介入するつもりは全くないのだから。

(理由は面倒だから。)

下手に気に入られて、ヒロインたちのあのカオスな場所に入る勇氣なんてない。

そうこう考えているうちに校門まで来ていた。

(今日もLet's 観察!!)

自らを鼓舞しながら校門をくぐる。

織斑一夏を観察しているときに抱く思いに気づかないまま・・・

Morimiyas side

ここは森宮家の家屋の中で最も広い部屋。

故に、森宮家の会合に使われる。

そして、この部屋に集まったのは現当主夫妻、森宮家の最高齢で  
「ご意見番の「能輪美年のわみし」、奏の世話役の夜行兄弟である。

皆神妙な顔立ちで佇む（たたずむ）。

その中で、奏の父切嗣きつじが口を開いた。

「この顔ぶれで話す内容は当然奏の事だ。」

いつもの気の抜けた話し方ではなく、いつになく真剣な口調で言葉紡ぐ。

その言葉に集まった全員が頷く。

「ここからは当主の私が。奏はもはや小学生になり半年。まだ早いかもしれませんが、森宮について教えておくべきだと判断しました。」

母の愛理あいりが代わりに言葉を続ける。

「僕は問題はないと思うがの？奏様はなかなか頭の良い子じゃ。何より話しておると精神の成熟が大層早いように感じた。小学校でも他の者との差が顕著けんちやみたいじゃ。」

車いすに乗ったままで能輪が意見を言う。

「能輪様までそのようにおっしゃるのであれば何も言えません。」

「したがって、世話係である我々夜行はそのことに賛成いたします。」

夜行の兄弟はどこか諦めたような声だった。

「思っていたことは皆同じということね。では、これで終わります。」

当主の愛理がそう締めくくった。

（奏。あなたはもう見つけたのかしら。）

Kanade (side)

授業も終わり帰り支度をしていると視線を感じた。

周りを見ても教室の中では誰もこちらを見ていない。

(気のせいかな?)

そう思い用意を終えて帰ろうと教室のドアを出たところで、誰が見ていたのかが分かった。

「お、お前が森宮奏か?」

妙に威圧感のある話しかけ方だなと思いつつ、

篠ノ之箒だろ女子がいた。

(まさかこの時からそんな口調!?)

「そ、そうですけど。誰?」

突然の威圧感に押されてしまい、こちらの口調もなんだか変になった。

「あつ、すまない。私は篠の「篠ノ之さん何やってんだ?」むつ。」

自己紹介中に割り込む声あり!! むむつ、これは朴念神の出現か!?

「おい、今はこいつと話してるんだ。」

「はっ? 誰こいつ。」

(ほお。君たちは初対面の人に向かってこいつと呼ぶのか?)

「とりあえず名前を教えてくださいませんか?」

まだ言い合いをしている二人に向かって無難であろう言葉をかけてみる。

「織斑一夏!!」

「篠ノ之箒!!」

同時に言われても分からーん!!

大丈夫かこいつら?

### 第3話 日常（後書き）

原作の二人と会わせてみました。これからがたいへんだ。早く原作に入りたい。

#### 第4話 突撃！！篠ノ之道場（前書き）

二日連続で投稿になります。今回Msブラコンの登場なのですが、この人が私の中のi sキャラランキング第一位でございます。ちなみに二位はドイツうさぎです。  
では、どうぞ。

## 第4話 突撃！！篠ノ之道場

Kanade's side

えーただ今、篠ノ之道場に来ております。

おや？と思われるでしょうが、あのこいつ呼ばわりから既に3日たっております。

あの後落ち着くまで待ち、無事に要件を聞きましたよ？

正直聞かないで帰ればよかったですと思いました。

短いですが。回想入りませう。

3日前

「篠ノ之さん？要件はなんですか？」

同時にそれぞれの名前を言ったことで、またもや言い争いを始めた二人に話しかける。

「今週の土曜日に来ると出稽古に連れてくると聞いたから、先に挨拶をしようと思った。」

(え……)

マジですか……。

現在

はい終わり。

そして現在。篠ノ之家の前で父の切嗣きりつぐと一緒にある人を待っているところだ。

父に知っている人だと言われ予想はつくが、

「はあ。」

気づかれないようにため息をつく。

その時、後ろから気配がすることに気づき振り向いた。

(この人……強い。)

「ほお。このくらいだと分かるか。」

感心したようにそのように言ったのは、箒の父親である篠ノ之柳しののちや韻ういん。

「はははっ。この子は森宮の子だぞ。」

笑い、そんなことを言いながら同じように、振り返った父を見る。そして、目の前の男性を見るといふより観察する。

（筋肉がついているのがよく分かるがっしりとした体。髪も黒々として若々しさにあふれている。）

隣で笑っている父を思う。

父様の事は好きだ。

だが不満も大したことではないが有るにはある。

（せめて無精髭はやめてほしい。）

剃ることに剃るのだが、それからはまた放置。

結局元の状態に戻ってしまうのだ。

その無精髭のためか目の前の男性よりも老けて見える。

（なんだか負けた気がする。）

某正義の味方が爺さんと呼んでいたのも分かってしまう。

この二人は昔父がまだ森宮家にいなかったころからの知り合いらしく、世界中を旅していたという父と偶然出会い気が合ったのか仲が良くなったという。

「それでは中に入ろうか。」

そう言い促され柳韻さんの後ろについて道場に向かう。

（原作だと織斑姉弟と箒の三人だったかな？）

ふと思いつく。

（あれっ？そういえば織斑姉を見たことない。）

ちよつとした発見だった。

道場に入るとすぐに三人の人影が見え、その一人から弱いがプレッシャーを感じる。

（あれが織斑千冬。）

そこには、初めて見るショートヘアの中学生がいた。

（危うい。何故そうも余裕が無い。）

錆びて今にも折れてしまいそうな刀。  
それが私の千冬の第一印象イメージだった。  
目がバッチシ合ってしまったことに、少し冷や汗をかきながら  
う思った。

Chijuyu's side

もともと今日は来る予定はなかったのだが、私が一夏と通っている道場の師範である柳韻りゅういんさんに「今日はぜひ来てほしい」とまで言われては行くしかない。

時間はいつも通りで良いと言われていた。

いつも通りに来て、いつも通りに着替えて用意をする。

柳韻さんがまだいなかったたので小学生の二人が話しているのを何気なく見ていた。

そして、道場に三つも気配が入ってきたことに気づき目をやると、柳韻さんと知らない父娘らしき二人組が入口にいた。

まず師範の柳韻さんに挨拶をし、次に挨拶をしようと見知らぬ父娘の方を向く。

印象は、

無精髭を生やし弱そうな優男。

将来は美人になるであろう弟と同じくらいの少女。

その二人に先ほどと同じような挨拶と自己紹介をする。

そして、切嗣さんからその娘の奏に視線を向けると目が合う。

一瞬時が止まった気がした。

心の中をのぞかれたような不快感を覚え、おもわず全力で敵意を向けてしまう。

(しまった!!)

そう思いすぐに目を背ける。

(何故あんなっ!!)

そのことについては何も言われなかった。

切り替えようとしたがうまくいかず、稽古中もそのことが頭から離れなかった。

当然だが全く集中できなかった。

Kanade (side)

自己紹介の際に思わぬ出来事もあったが、無事に稽古は終わり全員片づけをしている。

片づけの間考えるのは千冬の事。

(あれが『触れれば切れるナイフのような雰囲気』の状態……。あれは千冬から最初に感じた余裕の無さから生まれたもの。)

そこで隣でリラックスした様子でいる切嗣に相談しようと考える。

「・・・父様。」

「ん。どうしたんだい?。」

「あの・・・千冬さんのことなのですが。」  
声が自然と小さくなる。

「一度家の道場に招いても構いませんでしょ?。」  
思い切ってそこまで言い真剣な表情で父の顔を見る。

「・・・分かった。許可しよう。」  
するとしばらく考えていたようだが、許可を出してくれた。

「でも向こうは来てくれるのかな?。」  
「それについては今からたずねます。」

「じゃあ、自分で行きなさい。」  
そこまで話すと、父は柳韻さんのところへ行ってしまった。

いざ帰るときになり千冬さんに話しかけ少し強引に連れ出す。

「何か用かな?。」

その言葉をかけられたところで少し気合を入れ要件を伝える。

「・・・明日。森宮道場に来てください。柳韻さんに頼んで明日の稽古は休みにしていただきました。」

「なっ!?!?。」

突然のことに驚く千冬さんを見ながら続きも一気に伝える。

「話を戻します。明日は柳韻さんに送ってもらい森宮の家に来てください。」

「それは絶対なのか。」

確認するように聞いてくる。

「はい。すいませんがお願いします。」

そう答えると逃げ道をすべてふさがれたと思ったのか、苦笑しながらまた聞いてくる。

「それは当主の切嗣さんの決めたことか？」

少し驚いた。

彼女は森宮家について“少し”知っているようだ。

「いいえ。」

その質問に否定の言葉を返す。

「これは父ではなく、私が決めたことです。」

「え……」

さすがに意外だったのか、あっけにとられたような彼女の表情を見て思わず口元が緩んでしまう。

「ああ。ちなみに森宮家の当主は父ではなく母の方ですよ。」

そこまで言つと帰ろうと踵かかとを返しながら

「ではまた明日に。」

それだけの言葉を残し、私は待っているであろう父のところまで走って行った。

#### 第4話 突撃！！篠ノ之道場（後書き）

この中での設定についてですが、織斑家と森宮家は小学校の校区内の端と端にあるという設定で考えております。正直あとづけです。すみません。そして織斑千冬の通う中学校も、織斑家から小学校までの通学路の途中にあるということで、今まで主人公は見たことがなかった、ということです。

## 第5話 一夏の思い(前書き)

文章がまた変わってしまった。安定しなくて申し訳ない。読みにくくてすみません。

それでも読んでくれるとうれしいです。

## 第5話 一夏の思い

Ichika's side

俺は千冬姉の事が好きだ。

きれいでかつこいいい。

そんな9歳年上の年の離れた姉は、俺の自慢で憧れだ。

ただ少し怖い時もあるけど。

理由はわかる。

俺と千冬姉は親に捨てられたらしい。

らしいというのは、俺が両親の事を覚えていないからだ。

千冬姉に聞いても絶対に教えてくれない。

捨てられてからは生活できるよう住む場所を探した。

このころから俺は千冬姉にずっと頼りっぱなしにだった。

それが嫌で何かできることがないかと考えた。

千冬姉に言っても「お前は気にしなくていい」と言われる。

なら勝手にやって千冬姉がやるよりうまくできるところを、大丈

夫なところを見せるだけだと逆に意気上がった。

自分にできることは千冬姉の苦手な家事。

そうしてまずはやることを決め、すぐその日からやることにした。

だが料理に関しては自分ではどうにもできないことに気づき、通

っている道場でもあるお隣の篠ノ之家で教えてもらうことにした。

そのおかげもあって料理の腕も上がり、織斑家の食事も見違える

ようになった。

ちなみにちゃんと千冬姉も一緒に教えてもらったんだけど、なぜかあまりうまくならなかった。

このことだからかうと痛い目にあうから注意。

他にも千冬姉はとても強い。  
いや強くなった。

篠ノ之道場に行くようになってからまだ二年目なのに、周りと比べてもう数段上の實力を持っているのが分かる。

千冬姉はこれから先もどんどん強くなっていくんだろう。

そう思うほどに才能もあり努力家でもある。

そんな千冬姉が今日の稽古が終わってから、ずっと考え事をして  
いる。

稽古の内容には特に変わったことは無かったと思う。

ただ同じ小学校で別のクラスだけど同じ学年の女の子。

森宮奏。

それとその父親（無精髭のおっさん）が来ていたことぐらいだ。

稽古が終わって片づけをしていると柳韻さんと切嗣さん（無精髭）  
の声が聞こえてきた。

「ということだ。明日は千冬ちゃんをちょっと借りるからね？」

「それは構わんが。・・・まさか送ってこいと言っんじやないだろ

うな・・・。」

「おお。さすがが分かってるね。じゃあ頼んだよ？」

「はあ・・・。言っんじやなかった。」

柳韻さんは深いため息をつく。

「そう言わずに。久しぶりに愛理にも会いに来ないかい？」

「そう思えばいい機会か。そうだな。うちの家内も連れて行こう。」  
「ぜひ。」

そこで話は終わったのか二人はまた思い思いの行動に移った。そして帰り際に千冬姉は奏に連れて行かれて、帰ってきたときから考え込んでいた。

教えてもらったのは明日は一日家を出ること。  
それだけだった。

奏と最初に話したのはほんの数日前。

箒が話しかけているところに割り込んだ形で声をかけた時だ。

その時お互いに名前を呼び捨てにすることにした。

それまで体育の授業くらいしか接点はなかったが、彼女には少し大人びていてそれでいてかわいいという印象を持っていた。

箒も女の子だ。

でも奏から感じるものは全然違っていた。

名前を呼び捨てにする仲。

そのことが妙にうれしかった。

それが何故なのか。

俺は知らない。

千冬姉は珍しく朝早くから起きていた。

眠れなかったのかと聞くがちゃんと寝ることはできたらしく、ただ早く目が覚めたと言った。

からかわれたと思ったのか、頭を軽くはたかれた。

でも、これは俺たちのコミュニケーションの一つだから気にしない。  
い。

そうこうしているうちに千冬姉が出掛ける時間になる。

行くのは奏の家。

招待された理由は分からない。

それだけが聞き出せたことだった。

知らないことは教えようがない。

千冬姉も分かっていることなど分かるわけがない。

そりゃそうだ。

そしてその日。

千冬姉は疲れ果て眠ったまま帰ってきた。

傷だらけになって・・・。

## 第5話 一夏の思い(後書き)

今回は一夏について書いたのですが。Ichika(aside)は少しで終わるはずだったんですが、書いているうちにずるずると。開き直ってどうせだからこのままいくことにしました。文章だけじゃなくこっちも安定しない・・・。

第6話 訪問・・・思い・・・覚悟・・・（前書き）

PV：6388

ユニーク：1593

ありがとうございます！いままでこのシステムに気づいてなかったことに自分でも驚きです。もっと早く気づけよ！！です。これからも続けることを目標に頑張ります。

文章の書き方は安定しないかもしれませんが・・・。

第6話 訪問・・・思い・・・覚悟・・・

Chihuyuside

一夏に見送られ家を出た私は、柳韻さんとその奥さんが乗る車に乗り宮森家に向かっていた。

宮森家について知っていることは三つ。

一つ・・・古くからある家系である。

二つ・・・ヤクザのようにシマを持つらしく、近所からは頼りにされている。

三つ・・・噂だが宮森の名は世界的にも大きなネームバリユーがあるらしい。

これまで全くの無関係だった私が知っているのは、つまるところ親交のある柳韻さんから聞いたことだけだ。そして車の中で新しく教えてもらったことがもう一つ。

「宮森家は様々な意味で『力』を持つ。しかしその力はすべて一つの『あるもの』に向けられる。」

「一つのあるもの？それはいつたい。」

「その前に教えておきたいのは、宮森は守護の家系ということだ。つまり『あるもの』とは当主が定めた守護するに値する『者』。大切なのは当主が定めたということにある。それは何事にも勝る力を持つ。そして宮森はそのすべてで守護する。」

「宮森は何を基準に選んでいるんですか？」

「私も昔こっそりと聞いたことがあるのだが、『気まぐれ』だそう

だ。」

「は？」

「要するにその時の当主の意思、たった一つで決まるらしい。これは誰にも教えてはいかん。教えてくれた切嗣はその後で彼の奥さんに絞られていたからな。」

と、そこに柳韻さんの奥さんが入ってきた。

「あらあら〜。愛理に言っちゃおうかしら？」

「え〜。。。それはやめてくれっ!？」

「どうしようかしら〜?」

いちやつき始めた二人から目を外して今度は外の景色を見る。

宮森家に着くまでそのまま考えをまとめていた。

M o r i m i y a \ s i d e \

森宮の家の門に二つの人影がある。

「妃古寺。今日の客はお嬢自ら招待したらしい。」

一人は夜行丈一。

「私も聞いた。初めての事だな？」

もう一人は夜行妃古寺。

森宮奏専属の世話役である二人がここにいる理由は、客を迎えるため。二人の主が家に招待するのはこれまでで初めての事だったので、二人とも少々興奮しているようだった。このような会話は何度もなされている。

二人がまた確認をしていると、篠ノ之柳韻が運転する車が目の前で停止した。

「お久しぶりでございます。」

双子らしく二人そろって挨拶をし、車を誘導する。そして荷物を預かり、まずは切嗣と愛理の待つ部屋へと案内する。移動の最中も二人は柳韻と軽い世間話をしている。

ふと思いついたように妃古壱が千冬に声をかけた。

「申し訳ありません。あなた様が織斑千冬様でよろしいでしょうか？申し遅れました。私、夜行妃古壱と申します。そしてこれが「夜行丈一と」・・・はい。私たち双子で奏お嬢様の世話役をしております。」

「初めまして。織斑千冬です。」

「お嬢様が招待なされたのは初めての事ですし、我々二人うれしく思っております。」

妃古壱が目を少し潤ませながら言う。

「はあ。」

「お嬢の精神はすでに小学生とは合わなくなっています。話をする者はいらっしゃるようですが、仲の良いご友人はいません。」

対して丈一は悔しそうに言った。

話をしているうちに一つの戸に着く。

「話はこれまでにさせていただきます。この部屋でお待ちです。」  
妃古壱がそう言うと同時に丈一が戸を開けた。

Kanade's side

世話役の二人が三人を連れてきた後、私と千冬さんだけが道場に移動した。

「で？何故私を呼んだのか教えてもらおうか。」

道場で二人になった瞬間とげとげしい雰囲気をもと始めた。

「何故、ですか・・・。」

「そうだ。私たちは昨日初めて会ったはずだ。それに親しくなった訳でもない。」

そう言っただけで睨みつけてくる千冬さんを見て、まずは深呼吸をする。そして本題に入ることにした。

「何故そんなに余裕がないのか・・・。それに興味が出たんですよ。」

「興味だと？」

「あなたの弟さんの一夏君です。」

挑発も兼ねて本心を話す。このことは事実であり千冬さんと呼んだ理由ではない。

「それに、あなたは抜身の刀のようでしたよ？それでいて今にも折れてしまいそうで。見ていらなかった。何がそうさせるんですか？」

「それはお前には関係の無いことだ。帰らせてもらっぞ。」

そう言っつて立ち上がり帰ろうとする千冬さんに木刀を投げる。

「っ！？何のつもりだ。」

危なげながらもその木刀をつかみ、こちらをにらんでくる。

「私は人との付き合い方をこれくらいしか知りません。ですがあなたもどちらかというと肉体言語と言いますか、こちら側だと思っただので。」

千冬さんの目をまっすぐに見つめながら最後にもう一言を加える。

「戦いましょう。」

意識を戦闘用に切り替えながら宣言する。

私も森宮を継ぐための覚悟を決めなければならぬのだから。

第6話 訪問・・・思い・・・覚悟・・・（後書き）

サブタイからはわかりにくいでしょうが、今回は二つにわけること  
にしました。

次回は、VS織斑千冬になります。

戦闘ですが描写にはあまり期待しないでください。がんばります  
けど。

第7話 VS織斑千冬・・・ほどでもない(前書き)

初の戦闘シーン。無理でした。結局省きに省きまして、すいません。  
短いです。

## 第7話 VS 織斑千冬・・・ほどでもない

織斑千冬 side

もうどれだけの間打ち合っただろうか。初めのうちはこちらが完全に押ししていたはずだった。だが今は互角に持ち込まれている。疲れが出たわけではない。目の前の相手が、この短い間に実力を詰めてきているのだ。

負けるわけにはいかない。

不思議とそう思った。何かを賭けているわけではない。だが負けたくないと思った。

私と森宮奏にはどれほどか分からないが、実力に明確な差があると確信していた。いざ始めれば私の勝利という結果が出るだろうとも。

だから、

(なめられている)

そう思った。

しかし今では互角に打ち合っているではないか。そして抜かれようとしている。見誤ったわけではない。だが私は負けるわけにはいかない。一夏は私が守らなければならないのだから。

始まってすでに30分。いつの間にか楽しいと、まだ終わってほしくないと思った。まだやられてくれるな。もっと越えて見せる。

『魅せる』と。きっと私は笑っているんだろう。ふとそう思う。その間にも、体は勝手に目の前の相手に打ち掛かる。

いつからか記憶が残っていない。

Side out

二人はもはや無意識で打ち合っていた。どちらもまだ一つも当たっていない。そして止まらない。それどころか木刀を振るう速さはまだ上がっていく。

ミックスアップ。

これはボクシングではないが、試合のなかで互いを高め合っている。ただひたすらに相手を降さんとする二人は、少しづつ心を通わせる。

木刀から模造刀。模造刀から真剣。互いの獲物がぶつかり火花が散る。そう錯覚させるだろう。

織斑千冬は『原作』の織斑千冬の実力に近づく。そして森宮奏はそれにつられて己を越えていく。どちらも一気に登っていく。いや、落ちていく。

今の二人の間には何人たりとも入ることは許されない。

森宮奏 side

どれくらい打ち合っただろうか。いつの間にか木刀を振るう手が止まっていた。千冬さんも止まっている。顔を見ると、始まる前より心に余裕のある顔をしていた。

「感謝する。」

「そんな怖い笑顔しながら言わないでくださいよ。」

「そっちも同じようなものだぞ。」

「え、そうですか？」

笑いながらの短い会話。それだけでも今の私たちには十分だ。こっちの最強を見せなければ。そう思い握っていた木刀を投げ捨てる。

「……」

千冬さんは無言でこちらを見つめている。

足は肩幅に開。そして重心を落とし両手の掌で目の前に壁を作るイメージ。気を落ち着け、相手の一挙一動を見守る受け身の構え。宮森流は基本的に敵を迎え撃ち一撃で仕留めることを最上とする。宮森の役目は守護。襲ってくる敵にいちいち構ってられないのだから。

「終わりです。」

「・・・行く。」

千冬さんは正面から迫ってきた。フェイントも何も無い。いや、必要のない。これまでの最高の剣。だが関係ない。こっちは相手のどこかに触れることができれば勝ちなのだから。

「投げられたのか？」

道場の天井を見ながら大の字で寝転んでいる千冬さんがつぶやく。

「はい。」

「これが森宮か。」

「・・・はい。」

「すごいな。勝ったと思ったんだが。いつの間にかこの状態だ。」

「動けますか？」

「そう言うと私は同じように大の字になった。」

「動けん。」

「きっぱりと言われたその言葉に思わず苦笑する。」

「と、そこへ切嗣と愛理がやってきた。」

「終わったのかい？」

「父の言葉を聞いて千冬さんは上体を起こす。かなりきつそうだ。」

「負けました。」

「千冬さんの表情は、どこか憑き物が落ちたようだった。」

「そうかい。」

「父はそれだけを返す。」

「私に・・・森宮流を教えてくださいませんか？」  
意を決したようにそう言った千冬さんに、当主の愛理は、

「別にいいわよ。」

「軽っ!?!いいの!?!」

平然と言った言葉に思わず突っ込む。

「別にいいんだけど〜。」

にやりと笑う母を見て思わず顔が引きつる。絶対に私に何かあると直感した。

そして、

「奏に教えてもらいなさい。奏も分かったかしら。」

「拒否権は「無い!?!」・・・ですよね。」

やっぱり。とんでもないことだった。

こら馬鹿父、後ろでサムズアップすんな。なにそのいい笑顔は!?!

「でも私はまだ、教えられるほどではないと思うけど。」

「大丈夫よ。このままいけば私よりも強くなってるから。じゃ。がんばってね。」

そう言って二人とも出て行ってしまった。

「千冬さん?」

「あ。なんだ?」

「とりあえず覚悟は決めましたので、そちらも覚悟しててください  
いね?」

「・・・分かった。よろしくたのむ。」

そこまで言っていると疲れが一気に出てきた。

(大変だけど、今は寝てしまえ。)

・・・寝ることにした。

第7話 VS 織斑千冬・・・ほどでもない(後書き)

こんな感じに・・・。頭にはその映像ができて文章にできない。  
こんなに悔しいことはない。です。  
今回は二話連続です。

## 第8話 自覚？無自覚？（前書き）

本日2話目です。そろそろ一気に飛ぶと思います。そして早く原作に・・・。

## 第8話 自覚？無自覚？

森宮奏 side

前回のあらすじ。

千冬さんと試合。その中で互いの戦闘能力アップ！！そんなでもってなぜか私が教えることになりました！？

感想・・・なんでこうなった。ちくせう。

教えるといわれても、まずは何を教えればいいのかわからない。そこで適性の高いものを探しました。ええ探しましたよ。で、結局剣術にけっけい。これは明らかだったからいいもの。さてここからが大変。とりあえず型を教えてみる。最初はできない。当然ですけど。千冬さんがここで一言。

「無理です。」

・・・はい!？

これには頭を抱えました。聞いたところによれば、実はこの型は宮森家独自の型だったようで、幼いころから繰り返し返すことで可能とするのらしく。簡潔に言うと、中学生になっている千冬さんは遅すぎたということです。

なあんじゃあそりゃあー!!!

見るだけだと簡単そうに見え、実際はできないという超鬼畜仕様。ああ、私の常識が崩れていく。ぶつぶつと言っている私の言葉が聞こえたようで、千冬さんに

「いや、もともとおかしいだろ。」

はい、お言葉いただきましたー！。もうやめて！！私のライフはもう0よ！！ははは…。もうないものになってますが、前世の経験もあつたはずなのに、いつの間にか私の常識がおかしなことに。思い返すと確かにおかしいですね。この前は未来の鬼教官の千冬さんに勝ってますし。私小学生ですよ？

それから何とか持ち直した私は、型は諦めてひたすらに実践！！に変更。あの死合い（誤字に非ず）で、いつのまにか千冬さんと同等の実力になったのでちょうどいいでしょう。実際やってみると、いい感じになったのでこれはこれで良し。良いと言ったらいいのだ。もう一度言うけど、私の体はどうなってんの！？

千冬さんは稽古が終わった後はいつも母様のところに行く。聞いてみると宮森家の在り方を教えてもらっているようだ。ずるいと思うので私も一緒に聞くようになった。

平日は学校で一夏と箒の二人とつるむようになり、週末は自分の稽古と千冬さんとの実践形式での稽古をする。そんな日々が続き1年がたった。

2年生に上がってからあの人以外に友達ができず。変わらないう日々を送る。このころになると千冬さんの相手にも余裕ができてきて、ちゃんと私が稽古をつける形になってきた。

そんなある日のこと。いつも通りに学校に行き、今は帰る前の掃除の時間。慣れた動きで効率よく箒で掃いていく。すると、外が騒がしいことに気が付いた。

「やーい。男女。」

「何リボンなんかつけてんだよ。」

これは・・・。

「箒がいじめられてた場面？」

近くの窓からのぞくと、予想通り二、三人の男子が箒を囲んでいるのが見えた。とりあえずポケットから、持たされている携帯電話のカメラ機能で写真を何枚か撮る。そして場所を確認すると持っていた箒を片づけ、教室を出て廊下を走り出す。

もうすぐ着くところで、同じように助けに来たのだろう。一夏の声が聞こえてきた。

「別にいいじゃねえか。似合ってただろうが。」

「こいつら夫婦なんだぜ。」

そう言うで一夏と箒に向かってはやし立てる。それに反発した一夏が気に入らなかつたのか、はやし立てていた一人が一夏に手を出したのをきっかけに喧嘩が始まった。

一夏は篠ノ之道場で鍛えているので、二人をすぐに倒す。しかし残りの一人は偶然にも一夏の油断を突いた。

「やらせない！！」

そこに私が割り込み思いつきり背中から地面に落とした。やりすぎた！！

投げられた子は痛みで悶絶している。しばらくすると誰が呼んだのか、先生が二人ほど走ってきた。

それからはほぼ原作通りに進んだが、謝罪はいじめっ子の方の親もした。喧嘩両成敗と言ったところだ。決め手は私が撮っていた写真。それにプラスして、何気に森宮のネームバリューもここで効いたらしい。わが家ながらすごい威力だ。他に気になったのは、一夏と何度が目があつたくらいか。その時、恥ずかしいのか顔を赤らめていた。こちらもよく分からない感情が出てきて、赤くなつたのが分かった。

何となく、この人なら良いかもしれないな、と思った。

Side out

(原作そこまで読んでないけど) キングクリムゾン!!  
結果だけが残る!!...らしい...

一年後。小学三年生。

この一年の間に篠ノ之束にも会った。初対面の時にいきなりダイブしてきたのは驚いた。思わず投げってしまった。途中で気が付き手を放してしまい、地面には叩きつけなかったが、宙にこうスッポーンと飛んで行った。その後何度もダイブをしてきたので、結局千冬さんのアイアンクロウの餌食に。あれは痛い。みしみしって音を初めて聞いたよ(汗)

ある程度仲良くなり(なつかれ)よく話をするようになった。そこで私は束さんの性格の矯正を試みた。それは今もこれからも続くだろう。とにかく仲良くなった。たまに束さんの工房で話をしたり話をしたり...話を...あれ? ずっと工房じゃん。

ISの前身のようなパワードスーツの設計図も見せてもらいました。どこか白騎士に似ていた。

奏 side

あの後篇とはより話すようになったが、一夏と話するときはどこかぎこちなさげな感じができた。そのぎこちなさは、どこか暖かくまた心が締め付けられるような...。そんな不思議な感じ。これを千冬さん

に聞いてみると、驚いた顔をした。そしてにやにや。

ちよっとむかついたのでその日はいつもより少しだけきつくしてあげた。へっ、ざまあ。

稽古が終わり千冬さんが道場にぶっ倒れた後に、いつも通りのお話タイム。そこでも稽古前と同じことを、母様を加えて話す。それを聞いた母様は、

「奏。これから千冬ちゃんの家に行つてきなさい。」  
当然訳が分からないので聞き返すと。

「千冬ちゃんの弟君に、森宮として仕えなさい。これは決定よ。」  
にやにやしながらそう言ってきた。

「それに東ちゃんからも依頼されてるのよ?」  
「初耳ですよ!?!」

「それは今初めて言ったからじゃない。それに一夏君なら良いと思つてるんでしょ?」

その後はちゃんと説明された。

それは『恋』だと。

結局その時は、決めきれずにそのまま流れてしまった。  
後にこのことを後悔する。

## 第8話 自覚？無自覚？（後書き）

自分としては時系列は完全に原作と同じにしたいです。あくまでできる限りが付きますけど。  
次も頑張ります。

## 第9話 プロトタイプ

森宮奏 side

「カーナーちゃん。」

うるさい。うざい。ウサギ耳。

『う』の三拍子がそろったら天災のことだね。いや別に嫌いってわけじゃない。安心しなよ。  
でもさ

ガシッ!!

さすがに我慢の限界だわ、これ。

標準はその頭部。そこに原作を知る私が、千冬さんに教えたアイアンクロー。教えた私が使うから元祖とも言える技を使う。ちなみに、コツは親指と小指、または薬指をそれぞれ米神に合わせることに。千冬さんはこれがまだできない。免許皆伝までもう少し。

私の横にいた千冬さんに、ちらりとアイコンタクト。すると「やってよし」とのこと。じゃあ遠慮なくということ、万力のイメージでじわじわと締め付けていく。

「あれ？だんだんきつくなってきたんだけどー!？」

当然じゃん。痛くしてるんだから。

そこから一気に締め付ける。

「かなちゃん？どんどん痛く 痛っ、痛い痛いよー!？」

うるさくなったのでまだ続けることにする。

「にぎやー!？もうやめてー!?!?脳が二つどころかバラバラのミンチにー!?!」

そこまで言うとは微妙に痙攣し始めたので、力を入れていた手を放す。そして床に落ちて・・・うわぁ。ぴくぴくしてる。

「・・・きもいです。」

「ちよっとひどくない!? かなちゃんがやったんだよ。」  
つぶやいた言葉が聞こえたのか、途端に体を起こす。ウサ耳女。  
分かるよね? これ。束さんだよ。

誰に言っただらう?

あれから日にちもたち、何事もなければよかったんだけど、全く関係のない人につかまっている。あまり関わりたくなかった。

原作キャラの中で、一番の謎。そして天才ではなく『天災』と称される人物。

未来においてISの発明者となる。天才『篠ノ之束』。

女尊男卑、そしてライトノベル『IS』の中心となる『兵器』。

インフィニット・ストラトス。略してIS。

そして今

その原型を見てます。ああ。私の平穩が遠のいていく。

私の平穩を返せ!!!・・・逝つてもいいよね?

少し時間を巻き戻してみる。

久しぶりに篠ノ之家にお邪魔したところ、ウサギに拉致られまし

たー。ドンドンパフパフウー。

引きずられながら現実逃避をしていた。私を助けたのは、ご存じ  
対東兵器、ちふゆん！・・・もう東工房の中だけどさ？

これで冒頭になるのです。ハイ。

「で？」

それから沈黙を破ったのは千冬さん。私を救出に来たのはいいもの、自分も同じ目に会っているので少し不機嫌。だが助けに来てくれるとは、いい弟子を持ったものだ。内心頷きながら思う。別に師弟関係と言ってもいい状態だから無問題。モウマンタイ

「うんうん。ちーちゃんもハグしてほしいんだね！？」

そんなことを言い出した東さんに私は呆れ、千冬さんも頭を抱える。

「・・・東。」

「なになかな？」

「アイアンクローの練しゅーよし、説明しちゃうぞー！！・・・  
・それでいい。」

絶好調の東さんだったが、千冬さんが右手を持ち上げてくると、  
途端に掌をひるがえす。そして奥から、何か大きなものを引っ張り  
出してきた。

「・・・東さん。それは？」

何となく予想がついた私は、冷や汗をだらだら流しながら説明を  
求める。

「はいはい！！これは私が新しく開発したパワードスーツ。」

（それってISのことだよな！？白騎士だよな！？）

「でもでも？名前はまだないんだよね。」

「いいから早く見せる。」

なかなか見せようとしない東さんにしびれをきらしたのか、千冬さ  
んが催促する。今気づいたけど、千冬さんの手がなんかわきわきし  
てる。東さんはたまに発明をすると、その発明品を私たちに見せて

くれる。そして、何気に千冬さんが一番楽しみにしているのだ。

「ふっふっふ。ならば見せよう。これが、私の人生での最高傑作だ  
――！！」

そう言うとかけてあった布を一気に取る。

そこにあっただのは 黒。いや漆黒の方がふさわしいだろうか。

漆黒の鎧がそこにあっただ。

(・・・白騎士じゃない？歴史が変わったのか？それとも平行世界だから？)

思わず戸惑ってしまう。そんな私をよそに、東さんは胸を張って  
すでに胸は結構ある 説明を始める。

「これは以前から考えていたパワードスーツを改良して作ったのさ。  
そして、なんと！！宇宙にも行けちゃう優れもの！！そしてそして  
ね」

東さんが話していく内容は、私が知っていた事と同じ。つまりP  
ICや格納領域の話だ。

私は、表向きは驚いているようにしながら、続きを促す。

「なんだよ。すごいでしょ。あつ。それとこの子はあくまで試  
作品。プロトタイプだよ。とりあえず想定される最高の状態だから、  
リミッターをかけないと人は絶対に乗れないね。」

そこで東さんは言葉を切る。

「なぜリミッターをかける必要がある？」

不思議に思ったのか、千冬さんがたずねる。

「だってリミッターがなかったらさ？乗っている人は、動かした途  
端ミンチになっちゃうよ。それだけの性能があるんだよ。」

「お前はなんてものを作ったんだ・・・。」

・・・同感です。

「でねでね？この子の名前を募集しまーす。」  
来た！

私はここで手を挙げる。

「はい。森宮奏君！！」

「宇宙で活躍するんだつたら、『Infinite Stratoss』とかどうですか？」

恐る恐るだが提案する。

あれ？なにこの空気？

外したかと思っていると、

「おおー！！それいただきだよ！！！」

「ふむ、じっくりくるな。略すとISと言ったところか？」

東さんを見ると興奮し、千冬さんは納得したように何度も頷いていた。とりあえず気に入ってくれたようでひと安心。

「じゃあさ。かなちゃんが最初に触っていいよ？」

「いいんですか！？」

「うん！ほんとはちーちゃんからと思ってたんだけどね？ほら、かなちゃんがこの子の名付け親だから。」

はい、そうでしたな。さっきの事なのに忘れてました。

「だからお願い。その子はかなちゃんの物だよ。大切にしておいてね？ちーちゃんには手伝わってもらうけど、私はそんなこと聞いてないぞ！？」ちーちゃんお願い。」

東さんの言葉に背中を押されて、その黒いISの前に立つと、ゆつくりと触れる。触れた一瞬、闇の中に浮かんでいるような感覚を覚えた。でも不快感は無く、優しく包み込まれているようだった。

これが、形状は違うが、私の愛機との初邂逅はつかいこうだった。



## 第10話 IS発表後

この年は激動の一年となった。

知られてはいないが、そのパワードスーツは、“森宮奏”により“Infinite stratos”通称『IS』と名付けられた。その約半年後。篠ノ之博士は、世界に対して、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ、『インフィニット・ストラトス』を発表した。

だが、世界中の研究者、及び国を運営する者たちは、それを一蹴。そればかりか一方的に、その技術を要求。当然ながら、篠ノ之博士が応じるわけもなく、彼女の発明は世に出ることはなかった。

そして、篠ノ之博士は気づいた。森宮奏との交流により、“原作”と比べ、己と周囲の絶対的な差を、学び始めた彼女は、所謂“普通”との付き合い方も学んでいるところだった。

だが、時はすでに遅く。いかに“天災”の彼女であっても、過去を変えることは不可能。

『私の子を自慢したい！』

そんな子供じみた研究者としての、一時の感情に任せ、世界から注目を集めてしまった。そんな中、彼女は、また隠れることに決めた。世に出す時代が、まだ早すぎた、と後悔と無念を抱きながら……。そして、いつしか世界が“我が子”を、受け入れてくれることを願いながら……。

しかし世界は、それを許さなかった。

篠ノ之束side

篠ノ之束は自宅の、明かりも点けずに、ラボでたった一人、自分を責めていた。

いつもなら、きれいに整理整頓されているはずの、この場所だが、床一面に設計図であろう紙の束や、筆記用具などの様々なものが散らばっていた。

「……私は、……思いつがったのかなあ。」

ぼつりとつぶやいた言葉に答えはない。

「……私は、……やっぱり普通に生きていけないのかなあ。」

ぐるぐるぐるグルと、同じ疑問を繰り返す。

“普通”という言葉に、固執し始めたのはいつだったか。ふと考える。

(……そうだ。カナちゃんと知り合ってからだ。)

思い出すのは、大好きな妹が連れてきた不思議な女の子。

最初に彼女の、きれいな長い黒髪に目が行った。おもわず負けたと云って、それを聞いた千冬に、からかわれるネタにされている。背は小学生ながらに、三人ともそんなに変わらない。だが、彼女の目に強く惹かれた。色はほんのり赤っぽい。小豆のような。やわらかい色。そして自分と同じ天才型と分かる、賢そうで、それでいて理性的な目。その目を、一目で気に入ってしまったことを覚えている。そして、その時はまだ分からない感情だったが、その目に“嫉妬”した。

でも、こんな時頼ってしまいそうで……年下に頼りたい、助けてほしいと思ってしまう自分が情けない。親友の千冬もとても頼りにしているし、頼りにされている。でも、なぜか彼女の顔を思い浮かべているのだ。

(電話してみようかな……)

ラボに引きこもってからは、誰とも話していない。当然連絡も取っていない。食事は、妹が持ってきてくれるが、会話はなし。

(さびしいな……)

さすがに人の声が恋しくなる。そこで最近買ってもらったという

奏の携帯電話に電話することにする。

電源を入れ、家を除けば4つしか登録していない、アドレス帳の上から2番目を選ぶ。

興味もなかったので、着メロなどは特に設定していない。

コール音が一回……二回……三か「もしもし!!!東さん!!!心配してたんですよ!?!」

「わひゃあ~~~~~!?!」

突然の大声に、座っていた椅子の上からひっくり返って落ちた。起き上がろうとしている最中も、奏の声は途切れない。随分と興奮しているようだ。

「これから“すぐぐ”に”そっちに行きますからね!!!ラボの鍵はちゃんとあけておいてくださいよ??”

「は、はい~~~~?りよ、了解で~~~~す??”

「じゃあ!!!切りますよ!!!」

東が混乱しているうちに、奏は一方的に携帯を切ってしまった。……。これって東さんに、変なフラグが立つちゃったのかな?…

…あはは。」

混乱から立ち直ったのはいいものの、やばい予感を感じずにはいられない。

「でも……怒られて当然だよな。いっぱい迷惑かけちゃったから……。」

ますます落ち込んでしまう。

「あれ?」

一つ気づいたことがある。

「カナちゃん。“すぐに”って言ってた、よ、ね?」

冷や汗だ~~~~だ~~~~。

「た、たいへ〜ドガン!!!ちよっ!?早くないっ!?!」

動く暇もなく、ラボのたった一つの扉から、すさまじい音が聞こえてきた。そして、

「~~~~開ける(てよ)!!!」

声は4人分。そのうちの二つの声の持ち主は、扉を力づくで開けようとしている。かなり頑丈なはずの扉が、軋むのを聞いた束は、再度飛び上がり、

「待って〜〜!!扉が壊われちゃう〜!!!」

何とも締まらないことになる束だった。マル。

第11話 白騎士事件（前書き）

白騎士事件です。すごく短いです。

## 第11話 白騎士事件

森宮奏 side

“第52次篠ノ之束引きこもり事件”

実にゴロが悪いこの名前。番号は適当。何しろ数が多すぎて覚えていない。なんともネーミングセンスのなさが、滲むどころか、もうドボドボと流れ出している。……失礼。その名の通りにとらえてもらっても構わない。別に、深読みすることはないだろうけど。

私たちは、巢穴<sup>ラボ</sup>に引きこもった兎（束）さんを、無事に捕獲。

テレテツテテテテ テレテツテテテテ

テテテテ テツテツテ

調理開始。

今日の食材は、久々に出てきた兎（束）さんです。

まずピーをして（軽めのアイアンクロー）

ピー剥いでピーにして（服を脱がせて風呂に入れ）

ピーで味付けし（途中で箸が泣き出し）

じっくりとピーを通す（説教・折檻した）

この間たったの三分！！嘘です。

人はあらかじめ用意できないよね？

とにかく、久方ぶりに話をした我々。いろいろ話したよ。でも、

一夏と篝の小学生二人は、別に部屋に行かされて、何故私だけ残されたのか……。分かるけど、日を改めてほしかった。だが時すでに遅し。

……前門の鬼、後門の化け鬼。

……笑えない。

こんなふざけた表現しているけど、内容は真面目。それは分かってほしい。

Side out

### 白騎士事件

それは突然に起こった。

世界中の軍事施設が“同時に”ハッキングされ、大量のミサイルが発射された。

目標は 日本。

そこに現れたのは、謎の白いパワードスーツ。手に剣を携え、そこに存在するそれは、見る人に中世の騎士を連想させた。

騎士は、まず射撃による迎撃を選択。剣を左手に持ち替え、突き出した右腕に荷電粒子砲を呼び出す。

発射

発射

発射

圧倒的な力が、無造作に放たれた。閃光を受けたミサイルは爆発し、周囲のミサイルさえも誘爆させていく。

数を3分の2に減らしたミサイルとの距離がつまり、騎士は荷電粒子砲を粒子に変換すると、その象徴たる剣を構える。世界が注目する中、騎士はミサイル群に斬り込む。

一閃。

騎士の振るう剣の一振りには、確実にミサイルの一つをとらえる。

その移動速度に、防御力に、既存の“兵器”をただの屑鉄と思わせるほどの、その性能に世界は吃驚した。

しかし、ミサイルは確実に目標へ近づいていく。

(間に合わない。)

騎士が焦りの色を隠せなくなってきたとき、十機の戦闘機が突如介入。ミサイルに向かって攻撃を開始した。

戦闘機は一機ずつ数を減らしていくが、ミサイルの数の減少は加速する。

そして、戦闘機がすべて落ちたころには、ミサイルの迎撃は完了していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1602x/>

---

IS <守護の魂>

2011年10月29日03時03分発行